

切手に厠の香を聞く（1）

小川 義博

厠に興味を持ち、香を求めてはや10年。厠にその脳を占められた者が切手を見ると自ずとそこに厠の香を思い出し、幻覚が現れる。そのいくつかの幻覚にお付き合いいただき会員諸氏の厠香の聞き分けの参考にさせていただきたい。

切手に排泄、厠を扱ったものがあるのか？この迷題を持って切手収集を続けてきて諦めかけていたとき、なんとありました。しかも、2枚、これも長年、人に馬鹿にされ、蔑まれながら厠、排泄行為に関する学識経験(?)を深めていたおかげである。

一枚は通常であれば見過ごしてしまうような切手にそれを見出しました。かわいい人形の切手、しかもクリスマス切手である。その切手はアンドラ公国(スペイン)の1997年のクリスマス切手である。現物人形は手に入れられたのだが、切手は100円前後で手に入れられるものであるが国内では見つからず外国の知人がスペイン旅行時に見つけてくれ、やっとわが手に香を聞くことができた。

クリスマスが近づき12月にはいるとバルセロナのカテドラル広場にクリスマス飾り、人形を並べた出店を見ることができる。その中に大を



インターネットからの画像



Christmas — A119

1997, Nov. 25 Photo. Perf. 14
246 A119 32p multicolored 40 .40

スコットの表示部分と
カガネー人形を描いたアンドラ切手

している人形が沢山あらわれる。これを”ウンコをしている人”、カタルーニャ語で「カガネー」(Caganer)つまりウンコタレ人形という。これがこの切手の題材になったものである。クリスマスという神聖なときにふさわしくないと考えられますが、この地方ならではの堅苦しい時節に現実的な行為、すなわち現実生活をしっかりと見つめるということを示しているという説、また自然から得たものはもう一度地面に返すという意味から豊作を願う気持ちを表しているとも



いう説、また誰かがとても偉そうに見え、その偉さに負けそうになったら、その人がウンコをしているところを想像して、人間みんな同じと感ずることができる人形であるという説もある。



Walter Schmonger の絵画

2枚目はわが会長から教えていただいたもので1986年オーストリー発行のモダンアートシリーズの「崩壊」という作品の切手である。長らくアルバムにその存在は意識していたが、まさかそのものを表現しているとは感じ取れなかった。周囲に飛んでいるのは

虫で何か果物でも描いているかと考えていた。しかし、あらためてルーペで確認すると周囲のものは中心に存在する物の飛沫であることが分かった。この原画作者 Walter Schmonger はどうも飛沫を描くことを好むらしく他の作品にも飛沫を描いたものが存在している。とにかく、現代芸術は理解しにくい。モダンアートは難しい。

その折、会長が忠告してくれた。「何でこの種

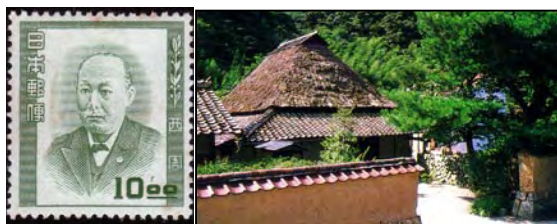
の切手が少ないかわかるか?」「それはな、切手は舐めるものであるからだよ」と さすが教養高き老人集団、稲門フィラテリーの親方である。

人物切手に香を求めると

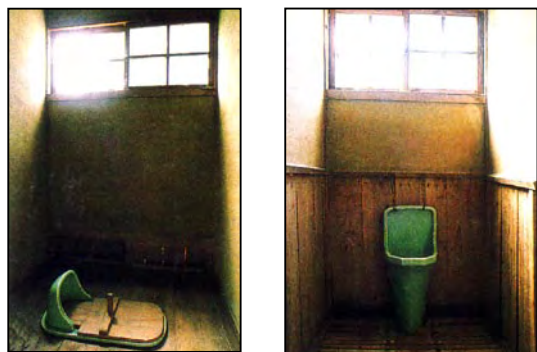
廁という性格上、個人名を上げての資料は少なくどうしても個人の旧居の付属としての資料に偏ってくる。妹尾河童の著書に著名人の廁の様子スケッチとともに記述されているが、切手に描かれた人物は紹介されていない。切手に香を求めると、文化人切手に描かれた方の旧家にたどり着く。

まず、文化人切手、西周を見ると津和野にある藩医であった生家の青磁陶製の便器、竹を床に用いた廁が浮かぶ。ただし、生家に残存する青磁の便器、これは西周が亡くなってからのものと考えざる得ない。西周(1829-97)が陶器の便器が使用できたとは考えにくい。陶器便器が普及したのは亡くなる6年前の1891年の濃尾地震の後であること、しかも小判型大便器といわれる前方が丸い覆いの有る大便器は前方に板を立てた作りの角型大便器に比較し技術的に難しくかなり後のことであると考えられるので西が使用したことはなかったであろう。

次に、同じ文化人切手の新島襄の旧居の廁の独特の香が浮かぶ。幕末から維新にかけて米国生活を送った新島が同志社大学の近くに建てた



代々藩医を勤めた西家全景



青色小判型大便器、青色朝顔形小便器を備えた廁

コロニアル様式の住い、三方にベランダのある和洋折衷の建築物である。自ずと廁も和洋折衷の独特の洋式の腰掛式便器を模した造りの廁である。長崎出島等の外国人居留の地にはすでに洋式便所が造られていたであろうが消失しており、この廁が現存する日本最古の洋風腰掛式便器の廁であるという。もちろん汲み取り式。因みに、洋式生活に慣れてない家人のために直ぐわきには和式の廁が設けられている。



1,2階にベランダを設け雨戸でなく鏝戸をつけた和洋折衷住宅

床面より50cm高く段をつけ、そこに25cm程の穴を開けた腰掛式の廁。全て木製で使用しない時は蓋が準備されている。

最後は、現在の文化人切手の中の幸田露伴の居宅。向島に借家をしていた建物が明治村に残る。露伴は借家生活が長くそのことから自分の家を蝸牛庵と称し、露伴の別号としてこの名を使用している。ここでは廁の蝸牛庵での位置が注意されねばならない。

この蝸牛庵の廁が日本家屋に多くみられる位置に造られていることである。廁が書院の床の間の裏に位置することである。この位置に注目したのが桂離宮の美を評価したドイツ人建築家ブルーノ・タウトであり、精神文化の中心書院(床の間)と自然現象の場の無比の対照を見出し、上便所として文化的意義を見出している。民俗学の立場からは座敷に入る者は神聖だから、そのものが使用する廁だから。上便所という考えを上便所=神便所からの発生という説明もある。

この蝸牛庵には次ページ写真の矢印の先に大の廁が2ヶ所連なっている。書には施主が歌舞伎俳優で付け人のため設けたと記してあるが、3年前の稲門フィラテリーの旅行の際、老舗酒問



平成 9 年文化人
幸田露伴



草花染付角型大便器がかなり
ゆったりとした蝸牛庵廁



明治村に残る幸田露伴の旧宅 蝸牛庵

屋が妾宅として改造した時、住人が三味線の師匠で多くの女弟子のために改造したという別の、上便所とはかなり異なる庶民的な現実味ある文化的意義ある話も聞いた。

次に、時代を遡って庶民の廁の香を聞きたいと考えると適当な人物切手は見つからない。苦し紛れにアルバムを探すと笑門来福落語切手の師匠に助けを求めることに気がついた。志ん生、米朝らが語る熊さん、八っあんが日々お世話になっていた庶民の廁。長屋の廁は"子別れ"、廁の造りは"家見舞い"、尿尿運搬は"汲みたて"、舟遊びでの処理は志ん朝の"船徳"などの噺などにふれられている。志ん生の語る"子別れ"に熊さんの家にやってきた吉原の女が"外惣後架だ

から、はばかりにいくのが嫌なんだよ"という箇所がある。落語の世界の様子は下の絵のようなものであったことを知らぬと理解が難しい。

一般庶民の住む長屋に廁はなく惣後架という扉も半分しかなく人の姿が外から見えるというものだったという。これを知れば廁から紙屑やに"柔らかい紙があったらちようだい"という声か



平成 11 年落語切手
古今亭志ん生



丸の中が惣後架という江戸の長屋共同便所

下は上の長屋の様子が再現された深川江戸資料館



惣雪隠という。京、大阪の長屋共同便所。江戸の惣後架より上等である

人従えたそれなりの位の侍が戸は半分で頭が見えている後惣架がある。この時代、廁にプライバシーを求めることは非常に難しかったことが推しはかれる。

この時代の廁から忘れてはならないことがある。それは尿尿は重要な肥料であり、農家にとっては必需



平成 9 年文化人
安藤広重



上野の山の辻雪隠
広重 江戸名所道外蓋



平成 10 年文化人
滝沢馬琴



垣の外で小便をする女
好色重宝記上方版 元禄期
一部 画像修正

品、従って尿尿は商品価値がありこの商品を生み出す店子を抱えた長屋の大家さんの大切な副収入源であったこと。この頃の川柳に「大晦日、大家は、尻で餅をつき」とある。尿尿 10 人分で年に 2、3 分となり、これは年に 8～10 万円となる計算である。(1 両 = 4 分 = 10～15 万) この商品も市場原理、食生活が豊かな商家のは高い価格で引き取られたという。借家人の場合は尿代は家主、尿代は借家人の収入となっていた。

京都でも尿代は借家人のもので、京ナス、京菜、京かぶら等と交換された。尿は野菜に即効性のある肥料であるから非常に珍重され、街角には尿用の便器がおかれ、男性だけでなく女性の使用も期待されたものが見られたようである。この様子を驚きをもって”京の家々厨の前に小便担桶ありて、女もそれへ小便をする故に、富家の女房も小便は悉く立て居てするなり。(中略) 或は供二三人つれたる女、道ばたの小便たごへ立ながら尻の方をむけて小便をするに耻るいもなく笑ふ人なし”と滝沢馬琴は著している。

この立小便の習慣は生活のためであり小便たごは 6 日に一度は農家に引き取られ野菜に交換されたという。京の漬物をささえる京野菜そしてそれをささえるこの立小便習慣ということができるか。京にとどまらず東北地方まで立小便習慣は存在し、気候にあった立ち振る舞いがあったという。



野菜類と尿尿交換のため街をいく百姓の姿 (江戸)

この女性の習慣

は意外と長く残っており、明治 41 年 7 月福岡県の教育関係者の会合で「女子学生の立小便の廃止」が検討された記録が残る。また、明治以降の上流社会の生活にもうかがい知れる。太宰治の「斜陽」のはじめの 2 ページ目あたりに「かず子や、お母さまがいま何をなさってるるか、あててごらん。」とおつしやつた。

「お花を折っていらつしやる。」と申し上げたら、小さい声を挙げてお笑ひになり、「おしっこよ。」とおつしやつた。ちつともしやがんでいらつしやらないのには驚いたが、けれども、私などにはとても真似られないという文がある。



女性立小便用便器
TOTO 製作便器 米国大学使用便器 ブルッセル空港便器

さらに、現在は女性の立小便便器も存在する。欧米の空港、大学において設置され使用されている。日本では昭和 37 年 TOTO が製作した記録があり、そのひとつが東京オリンピック開催時国立競技場のスタートラインの直下、精神的緊張による尿意対策として設置されたという。

おっと！

むこうから、あの有名な葛西舟が良き香を聞かせに「汲みたて」をのせてやってきました。

今回はこのへんで (続く)

2007 年 7 月切手教室のレジュメを加筆、訂正しました。

参考文献は次回にまとめて記す。

切手に厠の香を聞く（2）

小川 義博

今回は人物切手に続き、厠が明らかに描かれていないが、ひそかにその香を出している建造物の切手に鼻を近づけてみます。

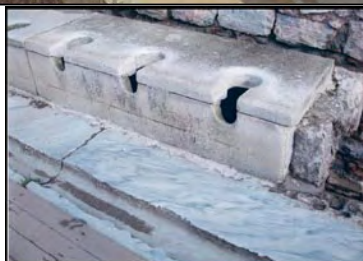
厠が建造物として出現したのは古く、紀元前3000年、今から5000年前のシュメール王朝がメソポタミヤのウル、ウルクなどに残した遺跡が最古であるといわれている。かなり下って、ローマ帝国時代の遺跡には素晴らしき水洗便所が残されている。トルコ、EHESUS 遺跡の切手から微かに香をきくことができる。何と18人が



トルコ
EHESUS 遺跡
切手
下
遺跡内の
公衆トイレ



一度に用を足せる公衆トイレである。このトイレの使用法は説明が必要である。穴の開いた場所に座り、終われば、用意された海綿等が括りつけられた棒を前の大理石面の溝に流れる清らかなる水に浸し、股下にくり貫かれた穴から差しいれ身体部分を清らかにし、使用した棒を清らかなる水で洗い流しておく。前の流れは端で流れを変えて、座面下を流れて排泄物を処理する。流れが方向を変える場所で排尿は別途行う

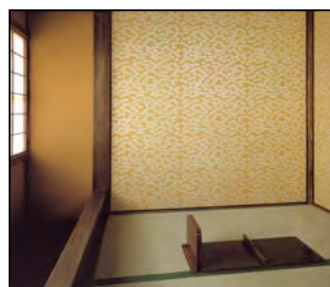


ことになっていた。この時代、手動ウオシュレットのトイレがすでに存在したのである。

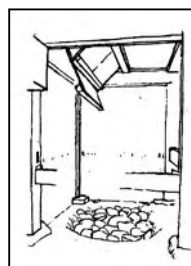
目を日本に転じると、最初はなんと言っても桂離宮の切手であろう。上便所に文化的意義を見出したブルーノ・タウトにその美を評価された建物は、普通切手と年賀切手水仙の釘隠しの2枚である。桂離宮には5ヶ所の厠があり、この切手印面の左手奥の方に優雅な厠が存在する。萌黄絹緑畳敷



四角い朝顔型便器の
小便所

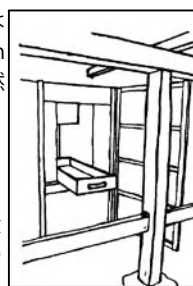


雲母で小桐紋が雅な壁の大便所



小便器の下は玉石が60cm埋められ自然吸い込み式

大便器の下に砂をいれた引き出しが用意されて一種の樋箱である



き春慶塗大便器（樋箱）と、前後に植木を置く板の間と香を焚く床の間をもつ大便所、障子の明かりとりと、大阪土壁に木製朝顔型小便器の小便所、竹張り床の手水の間がある。桂離宮は高床式の数寄屋造りである。厠の床下の造りが面白い、高床の長所を生かした排泄物の処理方法を工夫している。

この優雅さに対比されるような存在が庭に設けられた松琴亭の砂雪隠である。時をことにするが可動式椅子便器の香も気になる存在である



庭園の松琴亭の待合、腰掛
右 そこに設けられた砂雪隠



が、庶民の暮らしとは異なり、廁らしい香りが聞けないものであろう。

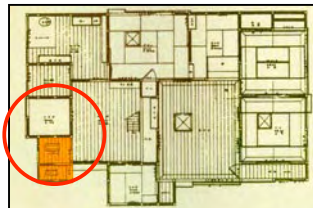
桂離宮と反対に位置する民家シリーズ第1集の旧渋谷家の切手に、懐かしい香を聞くことができる。出羽三山、湯殿山の麓に位置し、湯殿山信仰で宿坊にも利用された積雪を考慮した急勾配屋根の多層式農家である。1階は作業スペースである。廁は大戸口の左側で、この時代の多く農家と同じく南側に位置する。日中でも暗く、梁からたらされた綱をつかまり、黄金に浸からないように



日本の民家シリーズ渋谷家住宅



渋谷家の大便所
仕切戸はなく、縄のれんと命綱が特徴的



渋谷家の間取り

屎尿が大切な肥料であった時代、肥料として有効性を高めるために日の当たる南側に廁を設け、屎尿の発酵を促すことが重視された。



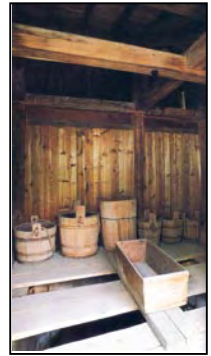
東北に残る命綱付廁

用を足すものであった。この綱を使用する廁は戦後しばらくは広く地方に見られた。

この廁に似たものが、日本の民家第5シリーズの合掌造りと第2次世界遺産シリーズ9集の合掌造り集落の廁である。合掌造りは岐阜白川郷と富山五箇山が有名である。白川郷の廁はヘツチャと呼ばれ地面に直径2m、深さ1.5mの便槽を作りそのうえに板を渡した廁である。中央に



日本民家シリーズ 白川郷

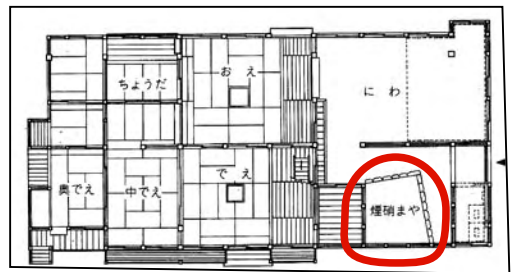


ヘツチャという廁

置かれた箱は"糞べら"入れである。ここでも農家の特徴として生産優先の配置(作業動線と肥やしにする発酵効率を優先)をとり、南側出入りに設けられているのが普通である。

廁に類したことで興味深い事実がある。それは五箇山で尿を使用しての硝石に代わる人造焰硝作りと、それをういて火薬作りが行われたことである。五箇山の煙硝作りは合掌造りとは特に関係はなく、気候条件、隠蔽のしやすさの点から五箇山がふさわしかったからである。

その製造方法は、人尿を素材とし、まず家の床下にまやという穴を掘って、人や蚕の尿に麻・ヨモギ類の葉、乾いた土を積み重ねる。それを五年以上ねかせておくと、人工の硝酸カリウムが生成されてくる。現代の化学的知識によると、これは土中にある硝化菌とよばれる一群の細菌が作用して、尿の中のアンモニウムイオンが亜硝酸イオンを経由して硝酸イオンに酸化されたわけで、硝化作用といわれる反応である。さて、



焰硝まやの位置とまやの造り

こうして熟成した培養土を集めて紺屋灰を加え、灰汁煮、中煮、上煮の三段階の濃縮工程を経ると、純白の硝酸カリウムの結晶が得られる。焰硝生産の宝庫になった理由には、材料にする植物の繁茂、湿気と腐敗を防ぐ高冷地の空気などの条件があった。加賀藩はこの地を厳重な監視の下に置き、その技術の秘匿につとめた。灰汁煮以下の三工程さえ、それぞれ別の村に分業させるという徹底した管理体制をとったという。

次の2枚の切手からは香合せを偲ばせる香が聞こえてくる。香の先は1969年沖縄政府から記念切手として発行され、1998年民家シリーズ切手にも描かれた、沖縄県にある国宝中村家住宅の厩である。

沖縄では戦前まで石組みの便所に豚を飼っていた。フールとい

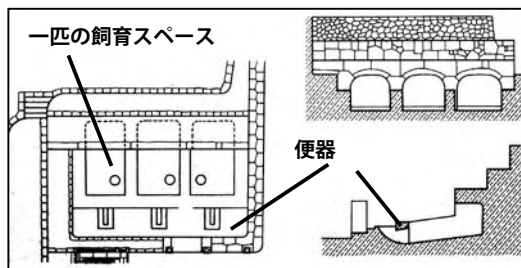


国宝 沖縄県中村家住宅

われ普通に見られた。人のものが豚の餌になっていたのである。人のものは50%は未消化で十分飼料となる。また、豚のものは敷き藁と発酵させると最良の有機肥料になる。このフールは養豚と廃棄物処理をセットにしたゼロエミッションの発想であったが、人畜共通



中村家豚便所（フール）3ヶ所の便器を持つ



感染症と人と豚の間を循環する寄生虫の存在などの点から戦後に破棄される運命であった。豚の放し飼いほどもかく、フールは韓国、中国、フィリピン等にみられた。また豚便所に準じた魚便所などがある。

次に民家シリーズから近代洋風建築シリーズ切手に目を移すと、水洗式がみられ香も薄くなっていく。

第5集岩崎家住宅は明治29年に20棟からなる邸宅群であったが、現在は洋館そして地下で往来できる撞球場、日本家屋が残っている。洋館2階に日本で最初に作られたといわれる水洗式がある。現在のように大小をかねるものでなく、小は入り口のスペースに隅付き小便器がある。この時代は現在のように洋式＝大小便器ということではなかったようである。英国製の重厚な便器が設けられている非常に採光の良い厩



東京都 湯島 岩崎家住宅

である。重厚な木製の便座を見ると、誇り高き国で女王陛下の座した木製便座に敬意を表し、その木でパイプを作製し愛用した紳士諸氏が



岩崎家の日本最初の水洗式便所





長崎県 グラバー邸

いたという話も理解できるものである。

第8集の開国にともなう接客所として文久3年に建てられたグラバー邸は度重なる改築、

改装が成され、住宅として整備されたのは明治20年頃であるという。その後、進駐軍の宿舎として接収され当初の厠の姿は不明である。ただ現存する木造洋館最古のものとして、その厠の位置は意味があるという。

住宅から神社、仏閣、城の切手に目を移せば自ずとその香も厠も少しかわってくる。有名な東司の東福寺は切手に見つからない。

普通・国宝切手等に多く取り上げられている日光東照宮からの香は、すばらしく広く清潔な厠の長屋という感じの西浄という建物から漂ってくる。石敷きの通路に、一坪の広さを有する便室が連なっている。便室の下には9室共通の石積みの溝が設けられ、大谷川の水を流す水洗式となっている。この西浄は東照宮建築群の中で他の建築と異なる扱いを受けている。まず、飾り丸瓦が他は葵の紋であるのに巴の紋になっており、次に他の建物は西側の石畳参道に正門を向かってその正面を向けてい



通路に沿って便室が9室並ぶ



便室の下は大谷川の水が流れる構造

全面朱色の弁柄漆塗り
飾り金具が使われ華麗な厠

るのに対して、西浄だけは東通用門に向かって建てられている。

次に、城にその香を求めると意外と少ない。世界遺産の姫路城の天守閣の地下に緊急時の籠城に備え、台所と隣接した木製のきんかくしをもつ厠が香を放っているぐらいである。この厠、いざという時の黄金糞尿秘密兵器を蓄えておくため非常用に落壺が埋め込まれていたが、汲み取り口はない。この落壺は地元の備前焼である。



姫路城天守閣下にある木製便器を持つ厠

彦根城、松本城等多くの城が切手になっている中、なぜかふるさと切手でしか切手になっていない熊本城には空中厠がある。熊本城の天守閣には3ヶ所の厠があり、その東側の厠は石垣から外側に張り出している。勿論、ものはそのままお堀の中へ、適量であれば魚の餌になったであろう。

この形式の厠は知識と資



熊本城の空中厠
竹の床である。
多分換気は最良であろう。



料をもとにルーペ片手にヨーロッパの国々の切手を探せば多くが見つかるであろうと考えるが、まだ、1枚だけでスイスはレマン湖畔シオン城にその香をやっと聞くにとどまっている。検証



英国 Wales 地方の Conwy Castle に見られる Garderobe



1998年 中国とジョイント発行。レマン湖、瘦西湖の小型シートに描かれたシヨン城



便座のはるか下、レマン湖面が光る。

していないのが不安であるが湖面に面した2ヶ所が厠であろうと想像している。新島裏の厠を彷彿させる使い込まれた便座の下はレマン湖の水面である。何のことはない、豚便所ではなくスイスの魚便所である。



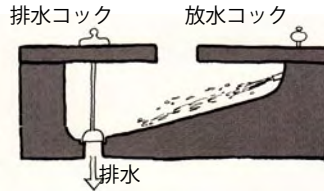
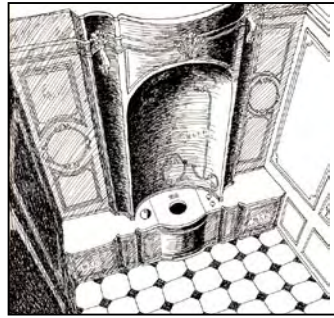
Athery 城の空中トイレを下から見る。

この空中トイレ、歴史は古く1200年頃に築城されたアイルランドのAthery 城にも見ることができる。この城の厠の下は板囲いができており、災害防止(?)に配慮がなされている。しかし、前頁のConwy Castleの厠となると防御不能なジュータン爆撃可能な規模である。

このように城のトイレを知ると、よく言われる”ヴェルサイユ宮殿にはトイレが無かった”ということは?、という疑問を抱いてしまうが、城のトイレが例外的な存在であったと考えるのが正しいようだ。ルイ15世は蓋付便器を設けた部屋を持っていた、ルイ16世は水洗式トイレを使用していたというがそれ以外にトイレはなく、274脚の腰掛式便器があったにすぎな



トイレという部屋はなかったヴェルサイユ宮殿を描くフランス切手



ヴェルサイユ博物館資料から復元された17世紀後半ヴェルサイユ宮殿のトイレ。便座の下には水で排泄物を処理する放水、排水設備があった。(朝日新聞、1982.8.27。「ベルバラも水洗使った大宮殿」『すまいの火と水-台所・浴室・便所の歴史-』彰国社)



トイレの代わりに用いた当時のチャンバーポット。今では骨董品として£350-450の値がつく

かったという。当時のヨーロッパには一般的にトイレという家屋に位置を占める空間はなく、種々の器、家具としての便器を使用していたと、理解するのが妥当であろう。その一般的なものがチャンバーポットというおまるを使用するスタイルである。ヴェルサイユの舞踏会ではこの器を皮の大きな手袋の中に忍ばせた貴族が見られたという。

このチャンバーポットの中身が宮殿の中庭に捨てられ、宮殿の生活はその香に包まれたものであったという。因みにこの宮殿が建てられた



貴族の寝室のチャンバーポット用の収納家具

のはルーブル宮殿の不潔さによる香の強さを避けてのことであったともいう。

昨年、国立京都博物館で、ヴェルサイユ宮殿のトイレ事情を考える上で、参考となるものを目にすることができた。140年ぶりに公開された蒔絵のトイレットボックスで



山水花鳥詩絵螺鈿箱 (トイレットボックス)
ヴェルサイユ宮殿美術館蔵

ある。1640年に日本からフランス貴族に渡り、美術館に収蔵されてきた"山水花鳥詩絵螺鈿箱"である。蓋を開けると赤いビロードの座面が現れる椅子便器である。

また、オーストリー Graz 近郊の民家園を訪れ80棟近い民家を見たが厠はなく、ベッド下にチャンパーポットが置かれていたこと、復元された当時の万屋の棚に売り物としてチャンパーポットがあったのが思い出される。貴族といえども基本は変わらず美術工芸品としてのポット収納家具が準備されたぐらいの変化しかないようである。

チャンパーポットに類したものに中国の馬桶(マートン)、日本の尿筒、尿瓶、樋箱、清箱(おかわ)、韓国のヨガンなどがある。

ここで留意すべきがポットの中身の処理であ



オーストリー民家園の一民家



民家のベッド下に必ず置かれているチャンパーポット



チロル地方の民家
オーストリー通常切手

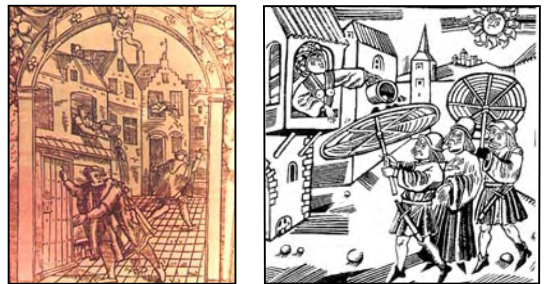
る。日本と異なり、尿尿に価値をおかない社会においては尿尿は廃棄物であり、その廃棄方法、処理方法が問題になる。

広い敷地を持つ貴族の邸宅は別として、都市国家として発達した、人口密度の高い都市における一般市民の処理が問題となってくるのは当然である。石造多層住宅の都市でのこと、処理方法も当然、手っ取り早く窓から外へ排泄される。18世紀初頭のスコットランド、エジンバラの早朝の風景が下のように記録されている。

「はるか頭上で5,6階あるいは10階の窓が開きポットにたまる糞尿を街路に放つ。捨てる人は"ガーディ・ロー(水がいくぞー)"と叫ぶのが礼儀であった。」とある。(フランス語であるのはフランスから入ってきた表現であることを示す。) このように当時のヨーロッパの都市の街路は不潔極まりない"排水路をかねた街路"であり。その対策として、ハイヒール、マント、傘が考えられたという。

このような劣悪な生活環境であらゆる物がパリであればセヌ川に集まりセヌ川は下水と化していたという。ここで注意されるのがヨーロッパの都市は、河川の河口でなく中流に位置しており、その及ぼす影響たるや計り知れないものがあったという。

当時のパリの空気は異様な臭気を持ち"腐った空気のパリ"と言われた。その後、1832年コレラで2万人の死者をみてから、下水道設備が



18世紀ヨーロッパの都市の朝風景を描写した画



18世紀パリ街路
中央に排水路
地下に下水



1880年頃の朝の川岸の様子
チャンパーをいっせいに川に空ける

